A 23　ヒトの成長諸段階における食味嗜好性変化の再検討

ノートルダム清心女大家政　○宮田義昭　岡山県立短大　田口田鶴子
岡山大教育　小野謙二

目的：さきにわれわれは，ヒトの食味嗜好性は年齢，性別により異なり，一般に加齢に伴い甘味嗜好性は低下し，塩味，酸味嗜好性は上昇することを報告した．このような現象をさらに確認するために，従来われわれが味覚嗜好性解析のため適用してきた「嗜好指数」算出の基礎となる3味（甘，酸，塩味）食品につき，再検討を加え，再解析を行った結果について報告する．

方法：甘，酸，塩味各5食品，計15品目のうち，酸味品からカルピスおよびジュースを除いた計13品目について，従来通り5段階の嗜好尺度に基づき，各食品および食品群別の嗜好曲線を示すと共に，ことに集団としての嗜好指数の世代別，性別の変化を明らかにした．

結果：カルピスおよびジュースを酸味品として取扱ったこれまでのデータと，それら2品目を除き，酸味品を3品目とした今回のデータを比較したところ，帯甘味性酸味品である上記2品目を除いた結果の方が，幼児から成人に至る成長過程を通じての食味嗜好性は，より明らかな特徴を示すことが認められた．すなわち，(1) 一般に成人するにつれて甘味嗜好性は低下し，酸味嗜好性は上昇した．塩味嗜好性は幼児期を除いて変化が小さいことが認められた．(2) 従って，甘－酸比は成人するにつれて著しい減少を示し，甘－塩比も同様の傾向を示した．一方，酸－塩比は加齢に伴い漸増する傾向が認められ，これは上記2品目をも含めた場合の逆の傾向を示した．ここでは特に，幼児期から思春期前期までの学童期，および思春期後期から成年期にかけての嗜好変化につき詳述する．